

## 「終わりの日」の預言と「終わりのしるし」の相違点

いわゆる「終わりの日のしるし」として知られる事柄ですが、その代表的な聖句、マタイ 24 章を検証してみたいと思います。

新世界訳のその部分を開くと、ランニングヘッド（上部見出し）に「終わりの日のしるし」としてされており、ものみの塔出版物でも常にそのように表現されますが、しかし、マタイ 24 章の記述は決して「終わりの日のしるし」などについては一言も触れられていません。

書かれているのは「終わりのしるし」です。別に同じようなものじゃないかと思われる方もおられるかもしれませんが、大きな違いがあります。

弟子たちが尋ねたのは、「世の終わりのしるし」です。

ギリ語：[ συντελείας τοῦ αἰῶνος ] [ the end of the world ] [ スンテレアス トウ アイオーノス ]

「終わりはまだなのです」「それから終わりが来るのです」というようにキリストが答えの中で使われたのも「終わり」そのものについての言及です。

ギリ語：[ τέλος ] [ the end ] [ テロス ] (スンテレアスのテレアスと同じ語根の同義語)

ちなみに、聖書中にいくらか出て来る「終わりの日」と訳されている語句は

[ ἐσχάτη ἡμέρα ] [ last day ] [ エスカテー ヘメラ ]

であり、マタイ 24 章で使われている、「終わり」とは基本的に異なるものです。

この語句を「終わりの日」と日本語に訳して間違いとは言えませんが、しかし厳密にはこの語は「最後」と訳するのが最も的確な語句です。英語でも End と Last の違いがあるので、混同しないためにも別の訳語で表すのが適切だと思います。(昔の映画は最後に [the End] 日本語では「終わり」という字幕が出たように、End や、終わりは瞬間であって時間の長さはありません。)

それで、[ ἐσχάτη ἡμέρα ] エスカテー ヘメラ は「最後の日」「最終的な時代」「終末期」と言うような表現で訳するのが本来の意味するところでしょう。ともかく、「日」という語を伴っていないので、最後の時代の一定期間というニュアンスを持っています。

しかし、マタイ 24 章（マルコ 13 章、ルカ 21 章も同様）は端的に「終わり」そのものについての言及であって、この語に、ある一定期間という意味合いはありません。

もちろん、ある幾つかの出来事が起きるのにそれに要する時間、期間は当然必要ですし、実際、「終わりのしるし」は、様々な証拠から、「3時半」に生じる出来事と合致しますので、3 年半、42 ヶ月間の出来事ですが、しかしマタイ 24 章の記述そのものも、「その時・・・」「その時・・・」という接続詞でずーと繋がっているもので、何らかの「期間」があるというような言及は全く存在しません。

にもかかわらず、これらの記述を常に「終わりの日」と呼ぶことによって、[ The end ] と [ Last day ] を混同させ、終わりのしるしの記述を、あたかもある一定の年月の間に起こることというイメージを持たせようとしているように思われます。

「終わりのしるし」に関する内容別区分

(マタイ 24:3 - 31)

3 弟子たちが自分たちだけで近づいて来て、こう言った。「わたしたちにお話してください。そのようなことはいつあるのでしょうか。そして、あなたの臨在と事物の体制の終結のしるしには何がありますか」。

<p>苦しみの劇痛 (始まり)</p>	<p>4 そこでイエスは答えて言われた、「だれにも感わされないように気を付けなさい。 5 多くの者がわたしの名によってやって来て、『わたしがキリストだ』(『その時が近づいた』[ルカ 21:8]) と言って多くの者を感わすからです。 6 あなた方は戦争のこと、また戦争の知らせを聞きます。恐れおののかないようにしなさい。これらは必ず起きる事だからです。しかし終わりはまだなのです。 7 「というのは、国民は国民に、王国は王国に敵対して立ち上がり、またそこからここへと食糧不足や地震があるからです。 8 これらすべては苦しみの劇痛の始まりです。</p>	<p>「終わりのしるし」に含まれないが、偽預言者が「終わりしるし」だと感わすために用いる出来事となるため注意事項として、最初に挙げられた出来事</p>
<p>苦しみの劇痛 (中盤)</p>	<p style="text-align: center;"><b>「終わり」のしるし</b></p> <p>9 あなた方を患難に渡し、殺す／あらゆる国民の憎しみの的 10 つまずき、裏切り、互いに憎み合う 11 多くの偽預言者、多くの者を感わす 12 不法が増す、大半の者の愛が冷える 13 終わりまで耐え忍んだ人が救われる者 14 王国のこの良いたよりは、証しのため全地で宣べ伝えられるそれから終わりが来るのです。 15 荒廃をもたらす嫌悪すべきもの</p>	<p>「終わりのしるし」に含まれる出来事。</p>
<p>苦しみの劇痛 (ピーク)</p>	<p>21 その時、世の初めから今に至るまで起きたことがなく、いいえ、二度と起きないような大患難があるからです。 24 偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ感わそうとして、大きなしるしや不思議を行なうからです。 27 稲妻が東の方から出て西の方に輝き渡るように、人の子の臨在もそのようだからです。 29 「それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。</p>	<p>聖徒が野獣の手に渡される 3時半と同期間</p>
<p>「終わり」突入</p>	<p style="text-align: center;"><b>「終わり」</b></p> <p>30 またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大いなる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。</p>	<p>キリストの臨在開始。「終わり」突入と同時</p>

**(マタイ 24:6) …「これらは必ず起きる事だからです。しかし終わりはまだなのです。」**

このキリストの言葉を改めてよく考えて見て下さい。

弟子たちの質問も、その答えも、テーマは「しるし」です。英語では「サイン」ですが、ともかくそれは、前兆のことです。事前のきざしの事です。

ですから、ある、しるしの出来事が「終わり」の 100 年前、10 年前でも、わずか 1 時間前のことであっても、当然ですが「終わりはまだ」です。

「終わり」の前の出来事を話しているのですから、何を話そうと、常に「終わりはまだなのです。」から、聞いている人がここでもし、それに敢えて応えたとしたら、「終わり」の前の話ですから、当然それはそうでしょう。という反応になるというものです。

「・・・それから終わりが来るのです。」とさえ言い得たとしても「しかし、終わりはまだ先です。」ということは、このフレーズは、どの時点でも、言うまでもない当たり前のことなので殊更に「しかし、終わりまだです。」と付け加える必要など初めから何もない。と言うことです。

このことから、敢えてイエスは、このタイミングで「終わりはまだ」という言葉を付け加えられたのだという事が推察できます。

では、それにはどんな意図があったのでしょうか。当然のことながらイエスご自身の中には、何を、あるいはどんな出来事を「終わり」と捉え、「どこからどこまでが、その前兆つまり「終わりのしるし」という表現に含まれる内容なのかについての明確なビジョンがおりになったはずはです。

同時に「終わり」の前に起こることには違いないが、これらは「終わりのしるし」の範ちゅうには入らないと理解されていた出来事もあったはずはです。

ですから、「しかし、終わりはまだなのです」という言葉を敢えて付け加えられた時、それまで話した事は、事前に必ず起きるが、しかしそれらは「終わりのしるし」という範ちゅうには入らない事柄だと言うことをはっきりさせるために、そのように言われたに違いありません。

では、「終わりのしるし」に何がありますか。という弟子たちの質問に、「終わりのしるし」ではないことまで話しに含められたのはなぜでしょうか。

それは他ならぬ、その頃に現れる偽預言者に惑わされる事が懸念されたからです。

そこでイエスは質問に答えるにあたって開口一番このように言われました。

**4** **そこでイエスは答えて言われた、「だれにも惑わされないように気を付けなさい。**

**5** **多くの者がわたしの名によってやって来て、『わたしがキリストだ』（『その時が近づいた』[ルカ 21:8]) と言って多くの者を惑わすからです。**

まずここまで聞いた弟子たちは、「終わりのしるし」についての質問をしたので、当然それは「真っ先に見られる「終わりのしるし」だと考えたにちがいありません。

実際、読者もここまで読んで誰でもそう捉えるでしょう。

しかし、ただ突然、誰かが、これといった説得力もなく「わたしがキリスト（油注がれた者）だ」「その日が近づいた」と騒いだとしても恐らく誰も相手にしないでしょ。まして惑わされたり

はしないでしよう。

惑わしが成功するためには、人にそう信じさせる何事かが伴っていなければならないでしょう。それでイエスは、偽預言者が用いる手だてに利用されるであろう、注意事項として、次のように語られたのです。

**6 あなた方は戦争のこと、また戦争の知らせを聞きます。恐れおののかないようにしなさい。これらは必ず起きる事だからです。しかし終わりはまだなのです。**

このように述べて、「必ず起きることになっている」戦争のことを取り上げて、「終わりのしるし」だと騒ぐ者たちがいる事を述べています。「戦争」自体は昔から幾度となく行われてきたので、さして珍しいことでもないのに、どうしてそれに注意を向け、なおかつ「しかし終わりはまだなのです」と付け加えられたのでしょうか。

自分がなぜ、そのように言うのかの理由を次の言葉で明らかにしておられます。

**7 「というのは、国民は国民に、王国は王国に敵対して立ち上がり、またそこからここへと食糧不足や地震があるからです。」**

確かにその戦争がそうした性質のものであれば、多くの人の注意を引きますし、「これでもう世界は終わりだ」と感じさせるに足るものでしょうし、実際にそれにつけ込んで、偽預言者は、これこそ預言されていた世の終わりのしるしだと騒ぎ立て、彼らが人々を惑わす事に成功するきっかけを与えてしまう事になることをイエスは気にかけておられたことが分かります。

だからこそ、「私が何故、「終わりが近い」という惑わしに気をつけるように今ここで警告し、それらは決して、あなた方が今尋ねた「終わりのしるし」ではないにも関わらず、そのように見なされ扱われてしまう理由は、それがただの、それまでのようなものではなく、歴史上始めて経験するような大規模な戦争であり、しかもそれに続いて、地震の頻発や、疫病の蔓延、食糧不足などが重なり、どう見ても尋常ではなく、間違いなく「終わりが近い」と人々が感じるのも無理からぬことであるからこそ、それに乗じた偽預言者の言葉を見抜けるようにという親心から、「終わりのしるし」の範ちゅうに入る出来事ではないものの、どうしても先ず知らせておきたかった事柄であるに違いありません。

そして、だからこそ、わざわざここで、「しかし、終わりはまだなのです。」と断っているのです。

ところで、今引用した 6 節の「恐れおののかないようにしなさい。」という部分ですが、このように訳されている聖句に用いられているギリシャ語は「 $\theta\rho\omicron\epsilon\hat{\iota}\sigma\theta\epsilon$  [スローエース] というもので、「困惑」「動揺」という意味の語句です。

この語は聖書の中でたった 3 箇所にか用いられていません。一つはこのマタイ 24:6 もう一つは福音書の平行記述であるマルコ 13:7 の同じ内容の記述。

そして後の一つはテサロニケ人への手紙にある次の記述見いだされます。

**(テサロニケ第二 2:2) …エホバの日が来ているという趣旨の靈感の表現や口伝えの音信によって、またわたしたちから出たかのような手紙によって、すぐに動揺して理性を失ったり、興奮したりすることのないようにしてください。**



ここではギリ語：[スローエース]を「動揺して理性を失う」と 2 つの語を使って翻訳しています。

(実際この部分に限らず、新世界訳は、不必要にというか、本来のシンプルなギリシャ語のニュアンスを正確に訳すと言うより、ただの 1 語を 2, 3 の言葉を使って、複雑にあるいは過剰に激的な表現を用いて訳している箇所が多々あります。

分かり易い一例を挙げれば、例えばギリ語：[アイオーノス] (英語では world) (他の多くの翻訳では「世」という語を新世界訳は「事物の体制」という表現で統一して訳しています。)

さて「動揺して理性を失う」という訳も、殊更にオーバーな翻訳ですが、それでもまあ、本来の意味である、「動揺」という表現を用いていますが、この同じギリシャ語を、マタイ 24:6 では「恐れおののく」と訳出しています。

ここまでいくと、オーバーな訳というより、何か別の意図的な思いが働いているように思えます。つまり、本来の意味である、困惑、動揺という語で訳してしますと、自分たちが人々にこの記述から抱いてもらいたいと思っている、前代未聞のともなく恐ろしい出来事 (つまり、これこそ「終わりのしるし」というイメージを与える事が難しくなってしまう故に、単なる「困る」という意味の語句を「恐れおののく」という表現で表そうとしていることが、浮かび上がって来ます。

ちなみに新共同訳では、この部分はこのように訳されています。

**「慌てないように気をつけなさい。」(24:6 新共同訳)**

さて、話しがちょっと横道にそれたので、本題にもどします。

このように、イエスは「終わりのしるし」について話す前にこのことに注意を向けられたのですが、いよいよ本題に入る前に、次の言葉で、一区切りを付けておられます。

**8 これらすべては苦しみの劇痛の始まりです。**

「対処しにくい危機の時代に入ったことは確かなので、苦しみの始まりには違いないので、これまで話した事柄はその始まりになると述べられました。

しかし言い換えれば、それらは「始まりに過ぎない」ことであって、「終わりのしるし」の範ちゅうに入る出来事は、それを凌ぐ、本格的なものであり、そのピークとして「2 度と起きないような大患難がある」ということを示されました。

言い換えれば、「苦しみの始まり」は「終わりのしるし」の始まりとは全く別であると言うことです。

前にも少し触れましたが、このマタイ 24 章の 9-29 の内容は、サタンが天から落とされて「女」が養われる 3 年半に続いて、他の預言書、啓示やダニエル書に記されている、全ての敵が裁きで滅ぼされる事になる前の、聖徒が野獣に渡される期間に生じるとされる 3 時半の合計の期間の内容と完全に合致します。

このことから、「終わりのしるし」は 24:9-29 の出来事であることが確認できます。

A.D.1 以来  
約 2 千年間

「終わりのしるし」と「終わりの日」の出来事の比較

[ ἐσχάτη ἡμέρα ] Last Day 最後の日  
終末期に見られる人々の人格特性の変化

「終わりはまだなのです」と言える期間

苦しみの劇痛 (始まり)	マタイ 24:4-8
苦しみの劇痛 (中盤)	マタイ 24:9-29 「終わりのしるし」(キリスト臨在の裁きの前兆)
苦しみの劇痛 (ピーク)	

「終わりの日」(エスカレーター エメラー)

終わりの時には困難な時期が来ることを悟りなさい。  
そのとき、人々は自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり、神をあざけり、両親に従わず、恩を知らず、神を畏れなくなります。  
また、情けを知らず、和解せず、中傷し、節度がなく、残忍になり、善を好まず、人を裏切り、軽率になり、思い上がり、神よりも快樂を愛し、  
信心を装いながら、その実、信心の力を否定するようになります。終わりの時には困難な時期が来ることを悟りなさい。  
そのとき、人々は自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり、神をあざけり、両親に従わず、恩を知らず、神を畏れなくなります。  
また、情けを知らず、和解せず、中傷し、節度がなく、残忍になり、善を好まず、人を裏切り、軽率になり、思い上がり、神よりも快樂を愛し、  
信心を装いながら、その実、信心の力を否定するようになります。  
一テモテ第 2 3:1-5 新共同訳

「終わり」

「終わりの日」とも訳される、この最終時代の期間に見られる人の人間性の破壊の傾向は、明確にいつから、どの出来事から成就するというものではなく、終末期になると次第にそうした傾向を示し、またそうした人の数も飛躍的に増えることを警告しています。しかし決して、この預言は「しるし」として記述されているわけではありません。つまり「終わりの日」の期間中に見られる傾向であって、「終わりの日」に入る前の兆しではありません。同様に、「終わり」つまり「臨在」の期間中に起きる出来事は「終わりのしるし」ではなく、「しるし」が全て見られた後の「裁きという現実」です。「終わりのしるし (前兆)」は「終わりの日 (終末時代)」の最終部分に見られる 3 年半の間の出来事に関する記述です。

備考：3:1 の「困難な」と訳されている[ χαλεποί ] ギ語：[ カレーポイ ] は「きびしい、難しい、つらい」といった意味の語です。新世界訳はこの 1 語を「対処しにくい危機の」と訳出しています。やはりこれもむやみにオーバーな訳といえるでしょう。